

寄稿1

【小説】愛すべき広報室の日々 ～JPOちゅーぶ設立からドラマ協力までの軌跡～

審査第三部医療 主任上席審査官 松浦 安紀子

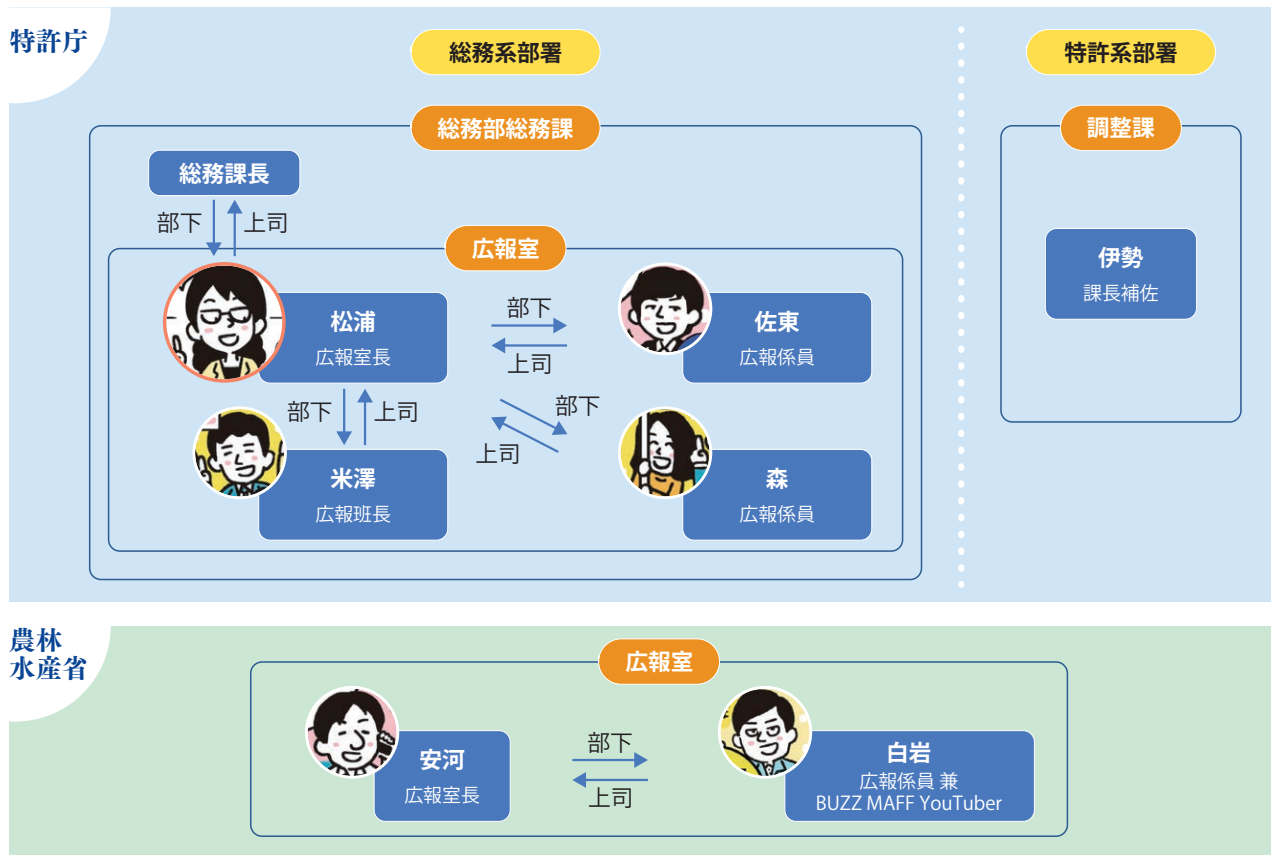
諸言

省庁による「やわらかい広報」が一般的になって久しく、特許庁によるYouTube発信などの一般向け広報も官公庁の中で一定の存在感を見せるまでになりました。また、知財をテーマとした日本テレビ系2023年4月期水曜ドラマ「それってバクリじゃないですか？」のロケ地として特許審査室を含む庁舎内各所が使用され、特許庁の現役職員がセリフ付きで出演したことも話題になりました。

本稿は、特許庁の広報室長が、庁内外の多くの人の協力を得ながら、庁公式YouTubeチャンネル「JPOちゅーぶ」の運営を軌道に乗せ、また、ドラマへの撮影協力を実現させるまでの過程を描いた、特技懇史上初（筆者調べ）のドキュメンタリー小説です。

（この作品はフィクションであり、登場人物と実在の人物は一切関係ありません。また、いかなる組織の見解を反映させたものでもありません。）

人物相関図



イラスト引用元：広報誌とつきよ Vol.56
https://www.jpo.go.jp/news/koho/kohoshi/vol56/06_page1.html



第一章

YouTube 広報を盛り上げろ！

悩める室長のJPOちゅーぶ奮闘記

〈2023年1月〉

どうしよう。本当に。

松浦は悩んでいた。昨晚、何度も中途覚醒してしまうほど悩んでいた。

総務課広報室長を拝命してから1年7か月が経とうとしていた。その間、夜も眠れないほど悩んだことは何度かある。室内のマネジメント、人間関係、広報コンテンツの企画や内容…。

ただ、初めてとなる管理職業務と、自分の専門分野からは畑違いである広報業務にもだんだん慣れてきた結果、ここ数か月の広報室はようやく平穏に業務が回るようになっていた。今年度の農水省とのコラボ動画二本立ても無事撮影を終え、一本目は昨年末に公開済み、あとは二本目の公開を待つばかりだった。

今回の悩みは、特許庁広報室の公式YouTubeチャンネル「JPOちゅーぶ」に関するものだった。来年度には、新たに庁職員から出演者を公募しようと考え、その旨、上司である総務課長に了承を得たばかりだった。だが、松浦は早速行き詰っていた。

「JPOちゅーぶ」は、特許庁の一般・知財初心者向けチャンネルとして、昨年末に新しく立ち上げたも

のだ。

特許庁には前から「JPO Channel」という公式YouTubeチャンネルが存在したが、これは、実務者向けのイベントやセミナー等の動画など、専門性の高い動画をメインに掲載するものだった。

松浦は2021年6月に広報室に着任した後、ひよんなきっかけで農水省のYouTubeチャンネル・BUZZ MAFFとのコラボを実現させ、等身大の職員が一般向け情報を発信する「BUZZ MAFFスタイル」の動画を初めて制作した。4万回再生を超える成果を上げ、庁内外の評判は上々だった。

ただ、その掲載場所が、お堅い動画が並ぶ「JPO Channel」内だったために、新たなチャンネル登録者や特許庁ファンの獲得にはつながらなかった。

そこで、コラボ二年目となる今年度の動画を掲載するタイミングで、一般向けに特化したチャンネルを立ち上げ、これをBUZZ MAFFのような国民に愛されるチャンネルに育てようとしたのだ。

この提案が広報班長である米澤から出されたとき、松浦はとても嬉しかった。1からチャンネルを育てるという覚悟を見せた部下を誇りに思った。チャンネル名は、「広報室チャンネル」、「東京特許許可局」などの案が出される中、最終的に広報係員の森が出した「JPOちゅーぶ」が採用された。

BUZZ MAFFコラボ動画や、同様のフォーマットで作成した動画「ここがすごいぞ！日本の十大発

〈参考〉新サブチャンネル「JPOちゅーぶ」



知財に詳しくない方に向け、知財の魅力・重要性をユーモア溢れる内容でお伝えする動画チャンネルです！



図1 JPOちゅーぶについて

(令和4年度「事務系職員3年目研修・商標審査官補スキルアップ研修」資料より)

● 明家」は好評だった。その成功に大きく貢献したのが、メインMCで出演した、広報係員の佐東だった。

最初こそ出演を固辞しようとしていた佐東だが、一本目の動画の成功で自信を得るや否や、みるみるうちに名物MCに成長した。テレビアナウンサーのように爽やかな風貌と活舌の良さを併せ持つ佐東は一般好感度が高く、特許庁動画の成功は彼なしではなし得なかったのは疑いようもなかった。

● 佐東を最初にMCに推した自分の見る目が正しかったことにほくそ笑む一方、松浦は今後のことを懸念していた。慣例によれば、佐東の広報係員としての任期は今年度末までである。当然のことながら、広報係員ポストに、毎回、MC向けの人材があてがわれるとは限らない。次の係員には、顔出し出演自体を嫌がられる可能性もある。JPOちゅーぶの命運を庁人事に委ねることは危険すぎる賭けと言えた。

● 農水省のBUZZ MAFFが安定的に運営されているのは、希望者が手を挙げる志願方式だからである。実際のところ、2800人の特許庁職員の中には、動画出演に興味がある人や、佐東のような適性を持った人が他にもいるに違いない。JPOちゅーぶの発展のためには、公募制を取り入れる他ないように思われた。広報室内で異論はなく、総務課長の理解も早々に得られた。

● とにかく、ポスト佐東を見出すことが広報室の最重要課題だった。

しかし、庁内に根回しを行う段になって、松浦は壁にぶち当たった。

● 松浦がモデルに考えている農水省では、「業務時間の2割をBUZZ MAFFの制作に充てて構わない」という省内ルールが明確化されている。だが、特許庁にはそのような庁内ルールがない。したがって、この動画業務が「本来業務にご迷惑をかけない」業務量であることを、見積もりを示して各課に説明する必要があった。

● この見積もりをどう取るかが、まず問題だった。台本をただ演じてもらうだけなら拘束時間は少なくなるが、わざわざ公募までして集まっていたく以上、それでは面白くない。では企画段階から関与してもらおうとすると、打合せなどでそれなりの拘束時間の発生は避けられなかった。この点に対して各課の感触は渋く、松浦は再考を強いられていた。

また、特許庁と農水省BUZZ MAFFとの間にはもう一つ違いがあった。BUZZ MAFFでは企画・撮影・編集まですべて職員が担っているのに対して、特許庁広報室では、年度ごとに契約する広報支援業者に委託して動画を作成していた。

JPOちゅーぶの立ち上げを機に、来年度は動画作成本数を大幅に増やそうと目論んでいたのだが、予算やスケジュールを諸々精査したところ、業務委託で作成できる本数はせいぜい年3、4本という結論となった。これも計算違いだった。

佐東の動画シリーズがそれなりに成功したのは、何本か継続的に出演することで、彼が「特許庁の顔」になることができたからである。BUZZ MAFFを率いる農水省広報室長の安河は各種メディアで、「応援されるキャラクターを育てる」のが省庁YouTubeの成功の秘訣だと述べている。典型例が、BUZZ MAFFのレジェンドである、鹿児島弁の愛されキャラ、白岩だ。ほっこりした人柄とセンス炸裂の動画作りでBUZZ MAFF人気ナンバー1を誇り、最近では地上波テレビ番組にも呼ばれるなどその活躍は目覚ましかった。

白岩のような国民的アイドルを育てるのが目標だと言ったらおこがましいのだが、たった3本の枠ではそんな夢のまた夢ではないか。メンバーが3人集まったとして、1人1本ずつ出演してもらって、そんなので意味があるのだろうか。

広報室に動画を内製できる編集能力があったら本数を増やせるのだが、松浦を含めた広報室員はその点、てんで素人だった。応募者の中に編集できる人がいるかもしれないが、それは蓋を開けてみるまでわからない。そもそも編集できる人がいたとて、そんなに業務負担をかけるわけにはいかないし…。ああ、私のバカ。なんで総務課長に公募やりますって言っちゃったんだ…！今さら引き返すわけにもいかないし…どうすんだ私！

松浦は、自分の詰めの甘さを呪うとともに、堂々巡りの思考にはまっていた。

これではいけない。何か突破口を見つけなくては。ふと、「安河さんに相談してみる…？」という考えが浮かんだ。

昨年度、最初のBUZZ MAFFコラボを実現させ、結果として特許庁広報に勢いをつけることができた

のも、すべては松浦が農水省へ電凸したことが始まりだった。

広報室に着任する前からBUZZ MAFFファンだった松浦にとって、農水省広報室は雲の上の憧れの存在だった。いきなり、特許庁とコラボしてほしい、なんて大胆な申し出をしたわけではない。そんなことは考えもしなかった。

当時、Twitterを含めたSNS運営をどう行うべきか、今回のようにうじうじ悩んでいた際に、SNSをうまく活用している省庁の広報室に電話でヒアリングを試みることを思いつき、その対象の一つが農水省広報室だったのだ。室長の安河は某大手広告代理店からの出向者で、その道のプロだと聞いていた。

電話に出た安河は、いろいろ教えてほしいと言う松浦に、「それなら一緒に勉強会をしませんか？ノウハウをいろいろお伝えしますよ。」と快く提案してくれた。実際に集まって意見を交わすうちに、コラボ動画の話はとんとん拍子に進んだ。それ以来、両広報室は良い関係を維持していた。安河とは同年・大学が同窓ということも判明して、お互いに旧知の仲かのごとく打ち解けるまでになった。

外部の方にこんなに気軽に悩み相談の電話をかけても良いものかと多少逡巡するも、松浦は安河の携帯電話を鳴らした。BUZZ MAFFだってきっと最初から高い編集能力があったわけではない、設立当時は同じ悩みを抱えていた可能性もある。松浦は、電話口に出た安河に、特許庁でも動画メンバーを公募しようと考えていること、BUZZ MAFFではどういう運営体制で、どう動画を作っているのかが知りたいということを伝えた。

「何か参考になる資料があれば共有いただけませんかと思って…」

「なるほど。マニュアルはあるんですけど、機密性の問題からお送りするわけにはいかないんですよ。申し訳ない。でも、こちらまでいらしていただけたら、いろいろお話できることはありますよ。」

「本当ですか。今からとかでもいいですか？今日は在宅勤務なので家から伺うんですが、一時間以内には行けます！」

「全然大丈夫ですよ。お待ちしておりますね。」

松浦は一縷の望みを抱きつつ、即座に家を飛び出した。

農水省広報室では、安河に加えて、白岩までテーブルに同席してくれた。白岩は、安河が操作するパワポに基づいて、YouTubeで見せる鹿児島弁そのままに、農水省広報室のSNS運用体制について松浦のためにプレゼンした。動画アップまでの具体的手順、省内調整のやり方、炎上対策等。レジェンドが自分だけのためにプレゼンをしてくれているなんて、一白岩ファンだった以前からしたら考えられない状況なのだが、この気さくさが彼らの魅力である。

「あ、室長、ちょっとページ戻してもらっていいですか。」

「へいへい。」

「すみませんね～、室長を使っちゃって～。」

互いに軽口を叩き合う上司と部下の関係性をうらやましくほっこりと眺めながらも、松浦は懸命にメモを取った。

資料の説明が終わった後、松浦は、白岩のようなスターを育てたいが編集能力がなくて動画が量産できないこと、庁の職員に業務負担をあまり掛けられないこと、という悩みを吐露した。一通り協で聞いていた白岩が、おもむろに口を開いた。

「松浦室長の悩みを聞いていると、ショート動画の作成ですべて解決するような気がするんですけど。」

「ショート動画？」

ショート動画とは、YouTubeショート動画機能を使った、縦長の1分未満の動画のことである。TikTokの流行とともに、YouTubeでもショート動画を楽しむ層が主流になってきていた。チャンネル登録の有無にかかわらず、AI判定によって幅広い視聴者に自動的に表示される仕様のため、通常の動画よりも一般視聴者へのリーチ力が高いという特徴があった。

「ショート動画って、すごい簡単に作れるんですよ。普通の動画だと、慣れた僕でも編集に2時間かかるんですけど、ショートだと、本当に20分くらいでさくさく作れちゃうんですよ。」

白岩は続ける。

「新しいチャンネルを広めるんだったら、僕なら絶対ショート動画を使いますね！BUZZ MAFFはもう大きくなりすぎちゃってるので、逆にやりにくい部分はあるんですけど。」

「そうなの？ 試しに作ってみようかなあ。でも、何をネタにしたらいいか…。」

「まずは、今までに発信した、やわらかめのツイートの内容を動画にしたりとか、いいんじゃないですか。」

安河の言葉に、突破口が見えた気がした。

おすすめの機材や編集ソフトを教えてもらい、丁寧にお礼を言った後、松浦は農水省を後にした。

いけるかもしれない。帰り道すがら、松浦は考えていた。

「やわらかめのツイート」は、松浦が広報室に着任後、不定期で特許庁公式Twitterで流してきたもののストックがある。松浦は、管理職としての室内マネジメントや他課との折衝には苦手意識があったが、知財制度や庁施策を面白く切り取って一般向けツイートに仕立てることは人一倍得意だった。管理職を降りてツイート専門官になりたいと部下に溢していたぐらいだ。実際、この1年7月の間に発信したやわらかツイートの大部分は、松浦自らの文案か、部下が作成したものに松浦が大幅に手を入れたものだった。

佐東がいるうちに、ショート動画を試作してみよう。

そう考えた松浦は、まずは、過去に評判が良かった「特許庁クイズ」などのツイートをもとに、動画用の絵コンテを何本か作成した。絵コンテといっても、1分未満の動画なので大層なものではない。エクセルに場面ごとのセリフを埋め込んだ簡単なものである。

演出は、「ATM法律事務所」方式でやってみることにした。出演者がアップで登場し、やや早口で解説を回すというもので、BUZZ MAFFを含め、当時多くのYouTuberが採用していた。

そのころには、佐東は「我にNGなし」を標榜するまでに広報業務に献身するようになっていた。松浦が声をかけると、予想通り、快く撮影に応じた。カメラの前で喋るだけの簡単な収録なので、1時間弱で5本の撮り貯めをすることができた。

松浦は早速動画の編集に取り掛かった。自分らに編集などできるわけないと思い込んでいたが、まずはやってみようと思った。ウェブで編集ソフトの操作方法を逐一確認しながら進めたため、最初の一本こそ1時間以上かかってしまったが、2本目からは同じフォーマットが流用できたので、30分そこそこで作り上げることができた。白岩が言ったとおりだ。

これならいける。

松浦は、JPOちゅーぶチームの公募方針を修正することにした。

募集対象は「月1本、ショート動画を作って提出してくれる人」とした。企画・出演・撮影・編集まで全て含めても、月あたりせいぜい数時間の負担であると説明した。素人の私でもできたので間違いないと、庁内を説得した。

こうして、無事、2023年度からの「JPOちゅーぶチームメンバー」の公募の実施が、正式に認められたのだった。



図2 初期のJPOちゅーぶショート動画

〈2023年3月〉

その夜、虎の門界限の居酒屋に、農水省と特許庁広報室のメンバーが集まっていた。ちょっと時期は遅くなったが、今年度の「BUZZ MAFF×JPOちゅーぶ」コラボ動画の打ち上げだった。

農水省側のメンバーは、安河に加え、カリスマYouTuberの白岩・松剛、そして売り出し中の新人YouTuber「知る」という、BUZZ MAFFファンからしたら垂涎の顔ぶれである。有名人と飲むのに完全個室の店でなくて良いのか松浦は気を揉んだが、先方は全く気にしておらず、松浦の考えすぎのようだった。

特許庁メンバーは、「BUZZ MAFFがいかにして某少女向けアニメとのコラボ企画を実現したか」などの話に興味津々であり、安河もまた、東西アニメーションへのファーストコンタクトの話など、気前よくその経緯を教えてくれた。

松浦は、直近で作成した公開前のショート動画について、安河らの意見を聞こうと思って、スマホで見せられるよう準備していた。広報班長の米澤が部下の佐東に突撃知財クイズをしかけるという内容で、「ATM法律事務所」方式の一人語り動画から、少し動きのある動画に変えてみようという試みで作ったものだ。

このころには、松浦はショート動画づくりにすっかりはまっていた。アップした動画は、ものによっては1000回以上の再生回数を稼げるまでになっていた。

農水省メンバーはこの動画を「面白い!」と褒めた。「これが特許庁の人ってことを、最初に表示するといいですよ。」

白岩が助言した。ショート動画は、冒頭の一瞬で、視聴者にそれを見るかどうかを判断される。JPOちゅーぶチャンネル登録者以外の一般の人々にも流れる動画だからこそ、これが特許庁動画であることを最初からアピールする必要があるというのだ。なるほどである。松浦は後でその旨のタイトルを追加しようと思った。

ふと、安河が言った。

「特許庁さんだったら、知財と全く関係のない質問に関して、無理やり知財に絡めて回答するとか面白いんじゃないですか。『それはいわゆるサブマリン特許と言ってですね〜』とか。」

サブマリン特許。

その言葉を聞いて、瞬時に松浦の脳裏に思い起こされた記憶があった。

20年近く前。松浦が特許庁の新人職員だったころ、職員研修後によく同期で集まって飲みに行くことがあった。

その日の飲み会での話題は「職場恋愛」。実は特許庁内でのカップル成立率はそこそこ高く、内部婚は珍しくなかった。しかし、通常、交際中はその事実を周りに隠そうとするため、結婚発表の段になって「あの二人は付き合ってたのか!」と周囲を驚愕させるというケースも少なくなかった。

目の前の席で飲んでいた小木が、その現象を、特許出願に例えて揶揄した。

「ああいうのやめてほしいよなー。ずっと非公開で、いきなり特許になってから公開されるみたいなの。」

すかさず、松浦は研修で覚えたての用語で応酬した。

「『サブマリン特許』って言ってね!!」

場がわっと沸いた。

恋愛相談だ。松浦は一瞬で確信した。誰もが気になる鉄板ネタの恋愛相談に、無理やり知財を絡めて回答してはどうだ。“場違いな専門用語”はウケるし、知的さがあって庁動画としてもちょうどいい。

サブマリン特許も良いが、もっと分かりやすいものはないか。

先願主義だ!

次の瞬間、松浦は安河に「恋も特許も先願主義!これでいきます!」と宣言していた。

このネタを動画化するにあたり、松浦は、今まで通り佐東に演じてもらうことも考えた。だが、これを佐東に語らせたならちょっとキザに過ぎて、彼のキャラに合わない。これはむしろ、人生経験のありそうな年長者が語った方がおもしろい。となると、室長か?

松浦は腹をくくった。

はたして、広報室長が知財に絡めた恋愛指南をする「特許庁上司に恋愛相談してみた〜恋も知財も教えて室長!〜」シリーズは当たった。特に、「恋も特許も先願主義」の第1弾の動画は、JPOちゅーぶショート史上初の3000回再生を突破した。この程度では世間的にはバズりの範疇には入らないが、特



<https://www.youtube.com/shorts/nipKQMUZzLo>



図3 JPOちゅーぶ『特許庁上司に恋愛相談してみた 第1幕先に告白されちゃった!』より

許庁の内製動画としては快挙だ。

心配していた炎上も見られなかった。知財クラスタのフォロワーからは、便乗して、独自の「恋愛の知財的解釈」を披露するものも続いた。「伝えたいメッセージさえ明確なら、思い切った表現をしても視聴者は受け入れてくれますよ。」安河の言葉のとおりだった。「先願主義」＝「出願はお早めに」というのは、特許庁として繰り返しアナウンスする理由がある重要かつ基本的事項だ。

庁幹部の間でも、この動画は好意的に捉えられているようだった。ある時には、松浦は廊下ですれ違った特許技監に、「あれ、おもしろいね」と声を掛けてもらった。庁内では偉い方ほどユーモアに寛容であることを、松浦は実感していた。

松浦は、理解のある職場に改めて感謝した。来年度のJPOちゅーぶチーム設立に向けて、幸先よいスタートのように思われた。

一方で、松浦の広報室長としての任期の終わりは刻々と近づいていた。実は、佐東だけでなく、松浦自身も、4月に広報室を離れる旨の内示を、3月中旬に受け取っていたのだ。

第二章

それってチャンスじゃないですか？ ドラマロケを敢行せよ！

〈2023年2月〉

JPOちゅーぶチームメンバー公募の目途が立ち、ほっと一息ついていた頃だった。

唐突に、日本テレビの関係者から広報室宛てに電話がかかってきた。

「実は、今度、知財をテーマとするドラマを計画中でして、特許庁さんには今後何かご相談させていただくかもしれません、ご挨拶させていただいた次第です。」

ドラマとな。知財ドラマとは珍しい。松浦のミーハー心がうずき、思わず前のめりになる。

聞けば、日本テレビ系の4月期水曜ドラマとして、知的財産をめぐるお仕事エンターテインメントドラマを企画しているらしい。弁理士にも監修を依頼済みだが、場合によっては、特許庁にも、ファクトチェックにご協力いただくことがあるかもしれないとのこと。

なんだか楽しそうである。

広報室長である松浦は、普段からマスコミからの知財関係の問い合わせに答えている立場である。ファクトチェックなどいつもの業務の範疇であって、お安い御用だ。

「それはそれは。ご丁寧にご連絡ありがとうございます。我々で分かることであれば何でもお答えしますよ！」

「ありがとうございます！ あと、もし可能だったらですが、特許庁でのロケをさせていただくなど、ご相談可能でしょうか？」

なんだかますます楽しそうである。

特許庁庁舎前でドラマ撮影が行われたことは何度かあり、全く問題ない。庁舎内でのロケの実績があるのかはすぐには分からなかったが、実現できたら面白いではないか。

特に、「特許庁の法廷」とも呼ばれる「審判廷」は、大理石張りの内装でカメラ映えがする。例えるなら航空自衛隊でいうところのブルーインパルス、特許庁が保有する最大の売り物だ。

「ぜひぜひ。うちの審判廷なんかすごく綺麗ですから、ぜひご検討を！」

「ありがとうございます！ またご相談させていただきます！」

電話を切った後、これはいい機会だなど、松浦は考えていた。

このドラマが話題になれば、知財業界が盛り上がるのは間違いない。知財ユーザーの裾野を広げるための「一般向け広報」を強化してきた広報室にとって、まさに追い風となる企画である。さらには、特許庁の認知度アップや、入庁志望者の増加にも繋がるだろう。こんな千載一遇のチャンス、広報室の仕事を多少増やすことになってでも、乗らない手はない。庁舎内のロケ地貸し出しも含めて、できる限りの協力をしよう。

ふと、松浦はあることを思い付く。

佐東を出演させてもらえないだろうか…？

JPOちゅーぶのショート動画ページには、すでに、松浦が制作し佐東が主演した動画が並ぶようになっており、JPOちゅーぶはさながら「佐東チャンネル」の様相を呈していた。試行錯誤の甲斐あって、1000回を超える再生回数の動画もちらほら出てきた。3月末までは佐東にチャンネルを引っ張ってもらおう、そう考えていた矢先だった。

佐東が、ちょい役でもテレビドラマに出演できたら、JPOちゅーぶは絶対に盛り上がる。

松浦は思い付いたら即行動しないと気が済まない質だった。すぐさま、それに向けて調整すべき事項をリストアップする。

特許庁庁舎でのドラマ撮影を実現し、さらに佐東を出演させるにあたって、取るべきクリアは以下だ。

- ①幹部クリア
- ②庁舎管理者クリア
- ③佐東本人のクリア
- ④ドラマ制作者側のクリア

まずは、手っ取り早く手が付けられる②を考える。1階ロビーなどの公共スペースは厚生管理室の管轄だが、今までもメディアの写真撮影を許していたことを考えると、撮影自体はまず問題はない。ロケ日を一般訪問者に迷惑の掛からない日時にすれば、問題なく許可が下りるだろう。その調整は、実際にロケ希望日や希望場所が煮詰まった段階で、厚生管理室とすることとしよう。

審判廷だけは、念のため審判課に早めに相談してみることにする。担当者に電話で問い合わせると、「口頭審理の予定が急遽入った場合は優先させてもらうが、それ以外であれば使用は差し支えない」との回答で、まあ想定どおりである。

物理的なフィージビリティの目途が立った段階で、①に着手することにする。松浦は、近くの席に座っていた、上司である総務課長に声をかける。総務課ではフリーアドレスを導入したばかりで、課長も他の職員に混ざり、大部屋内の座席の一つに座るようになっていた。

課長室にいらっしゃったときよりお声がけしやすくっていいな、などとフリーアドレスのメリットを再認識しつつ、松浦はドラマ撮影への協力・佐東売り込みの私案を課長に説明した。

課長もドラマ撮影への協力は賛成であった。佐東の売り込み案にはびっくりしていたが、「あまり無理強いして先方に迷惑をかけないように」とコメントするにとどまったため、松浦はそれを課長承諾と解釈した。

課長の雰囲気からしても、総務部長や特許庁長官に事前にお諮りするまでの案件ではないだろう。部長以上にはもっと固まった時点で報告を入れることにして、とりあえず①も完了である。

そして③である。①と③のどちらを先にするかは難しいところだったが、ちょうど本日は佐東が在宅勤務日だったため、すぐに声をかけることができる①を優先したのだ。

佐東が快諾するかどうかは分からないな、と松浦は思った。今でこそ「我にNGなし」を標榜する佐東だが、それはあくまでYouTube上の話である。地上波ドラマは話が違いますよと、躊躇われる可能性はなかった。なにせ、最初のYouTube出演の際に固辞しようとしていたように、元来は慎重な男である。

松浦は、日本テレビからの依頼の一部始終を、Teamsの広報室チャットに報告するとともに、「佐東君を出してもらえないか交渉してみようと思うのだけど、どうかな？」と書き込んだ。こういう繊細な話は、本来なら、対面で、相手の顔色を窺いながら話すやり方を松浦は好むのだが、今回は急な話なの

で致し方ない。

さあ、彼の反応はどっちだ。

永遠のように感じられる時間を息を詰めて待つ。しばらくして、ぼん、と、佐東より「びっくり」のリアクションが付いた。

佐東らしい、謙虚な承諾の印だ。

佐東の受け止めがまんざらでもないと感じとった松浦は安堵した。③も了である。

④を試みたのは、ドラマ制作班から次の電話が来た時だった。

松浦は審判廷の使用がOKであることを伝えた上で、それとなく話を切り出した。

「うちの佐東は、特許庁のYouTubeでも人気があって、結構喋れる奴なんですけど、ちょい役で出演させてもらうことはできませんかね…？」

思った以上に、相手の感触は良かった。

「JPOちゅーぶと日本テレビのコラボ、おもしろいですね！セリフが多い役だと、どうしても演技力で役者さんと差がついてしまうので難しいかもしれませんが、ちょっとした役ならありだと思います。検討させてください。」

松浦は心の中でガッツポーズをする。「ぜひ、よろしくお願いします！」

〈2023年3月〉

広報室への挨拶と庁内の下見を兼ねて、日本テレビとドラマ制作会社の職員からなるドラマ制作班が特許庁を訪れた。

お通した会議室で、制作班は、ドラマの概要を広報室に説明した。『それってパクリじゃないですか？～新米知的財産部員のお仕事～』（奥乃桜子・集英社）という小説を原作とするドラマであること、主役の藤崎亜希を女優の芳根京子が演じること、特許庁のシーンは原作にはないが、オリジナルストーリーとしてドラマ中盤に入れる予定であること。

松浦は、改めて佐東を制作班に紹介した。反応は上々だった。「審査官2の役ならいけるんじゃないですか」と、スタッフ同士で話が盛り上がる。メインの審査官1に電話取次をする、ちょっとした役どころであるが、十分にありがたい話だ。その件は引き続き検討していただくことにした。

特許庁庁舎のロケに関しては、松浦は、お貸して

きるところは全てお貸ししたい、全面協力させていただきたい、と申し出た。

「大変ありがたいです。それでは、後ほど、お借りしたい場所のリストをお送りしますので、可能な範囲内でご検討いただければ。」

「はい、よろしくお願いします！」

その後、広報室一行は、制作班を審判廷にご案内した。その荘厳な雰囲気には制作班もやはり感動したようで、「審判のシーンは今のところ台本には入っていないのですが、ぜひ使いたいですね！」と感想を漏らしていた。

エレベーターの前で制作班を見送り、広報室に戻る道すがら、佐東が米澤に「僕、芳根京子、めっちゃ好きなんですよ…」と耳打ちしているのを、松浦は聞き逃さなかった。

後日、ドラマ制作班から、「できたらロケに使わせていただきたい場所リスト」が届いた。

- ・1階ロビー
- ・審判廷
- ・特許審査室、またはその代わりとなるオフィスエリア
- ・面接室
- ・食堂

審判廷は確認済みだ。1階ロビー・食堂については、森から厚生管理室に問い合わせてもらい、使用可能との回答を得た。

面接室は、管轄の調整課に確認する必要があるが、元々外部の人を通す用途の部屋であり、問題になることは考えにくかった。

特許審査室はどうか。

それはさすがに無理ではないか、というのが松浦の第一印象だった。審査室は、審査官が日々の仕事を行う執務室である。迂闊に外部の人を入れて、機密書類など見られてしまえば大変なことになる。

「1階に庁内見学者用のデモスペースがあって、そこに審査官用端末も並んでいるでしょう。そこで審査室シーンを取ってもらうのはどうかな？」

「あれ、審査室だめなんですか？」

声を上げたのは佐東だ。

「BUZZ MAFF コラボ動画の時にも撮影カメラ入りましたし、フリーアドレスを導入している部屋なら、大事な書類が置きっぱなしになっていることも

ないから、大丈夫かと思ったのですが。」

そうか、フリーアドレス審査室を使うという手があったか。

特許庁では各課でフリーアドレス化を進めている。総務課と同様、審査部でも、先行していくつかの審査室がフリーアドレスを導入済みだった。

毎朝出勤時に好きなデスクを選ぶというフリーアドレスを行う上では、退庁時にすべての持ち物・書類を片付ける「クリアデスク」が必須となる。佐東の言うように、閉庁日なら、すべてのデスクが綺麗に片付いているはずである。ロケは不可能ではない。

官公庁の執務室でのドラマ撮影など史上初だろうから、話題性も期待できる。特許庁がフリーアドレスという先進的な取組を導入していることのアピールの機会にもなる。

「確かに、フリーアドレスならワンチャンいけるかもしれない。担当者に相談してみるね。」

松浦は特許審査室を管轄する調整課に足を運んだ。庁内屈指の多忙な部署に余計な面倒を持ち込むことになるので、担当者の性格によっては嫌な顔をされる恐れもあったが、幸運なことに、松浦が話を持ちかけた課長補佐の伊勢は話の分かる人間であった。彼は大乗り気で、ロケ対応に人手が必要であれば調整課のメンバーをヘルプに出しましょうとまで申し出た。ドラマが成功すれば特許庁志望者の増加が期待できる。審査系職員の採用も所管する調整課にも、この話に乗るべき十分な理由があった。

伊勢とともに、特許系上層部へのご説明に上がった。

「なぜ、わざわざ審査室を開放する必要がある？ 適当なセットで撮影してもらおうのではダメなのか？」

初めこそごもっともな疑問を呈されたものの、二人がかりでじっくり話をさせていただき、これが特許庁にとってまたとないPRのチャンスであるということを上層部にも理解していただくことができた。

かくして、特許審査室をロケに使用する許可は下りた。特許庁全庁を挙げてのドラマへの協力体制が確立した瞬間だった。

特許庁ロケの日取りは4月の週末に決まった。4月に佐東が広報室から商標審査室に異動することは、上司である松浦には既に知らされていたが、ドラマ出演は佐東にしかできない大役なので1日だけ

彼をお借りしたい、と、松浦は商標課長に直談判し、こちらは無事許可が下りた。

3月17日。4月異動の内示日である。朝からそわそわする佐東だが、昼を過ぎてても一向に内示のお呼びが掛からない。

「商標課長、僕を異動させることを忘れてるんですかねー？」

と佐東。そんなはずはないのだけど、と心の中で苦笑する松浦。

そんな折に、総務部長室から呼び出しの連絡が入った。佐東ではなく、松浦宛だった。

松浦も、4月1日付けで特許審査室に異動することが告げられた。

〈2023年4月〉

4月期新ドラマ『それってパクリじゃないですか？』の情報が解禁されるや否や、Twitterの知財クラスタは、この過去に例のない「知財エンタメドラマ」に期待する声であふれた。

前評判は上々のように松浦には感じられた。

第1話放送を数日後に控えた、特許庁ロケ当日。

5時に起床した松浦は、急ぎ身支度を整えた。

休日出勤なので、ラフな格好で良いかな…？と一瞬迷ったが、もしかしたら急遽エキストラ出演を頼まれるかもしれないし、と思い直して、ジャケットを羽織ることにした。後に判明するが、この判断は正しかった。

ロケの朝は早い。6時半に松浦が特許庁に到着した時には、すでに制作スタッフと現・広報室職員が現地入りしていた。

4月以降の広報室の様子は詳しく知らされていないので、ロケ日直前までにどのような庁内調整が行われたかを松浦は知らない。とはいえ、年度初めのただでさえ忙しい時期である。ロジ担当の森に相当負担がかかっていたことは想像に難くない。その苦勞に報いるためにも、このロケは必ず成功に導く必要があった。

広報室を離れることになった松浦は、4月のロケに参加する権利を失ったかに思われた。しかし、こ

の件はどうか最後までやらせてくださいと上層部に直訴した結果、異動後にもかかわらず、こうして休日出勤の許可を得ることができたのだった。

前・広報室長である松浦の本日の最大のミッションは、「佐東の密着動画を撮ること」。JPOちゅーぶに掲載するための、ドラマメイキング動画である。

50人を超える制作スタッフが現地入りする中、4名の現・広報室員は、現場を仕切るだけで手一杯になることが目に見えていた。とてもJPOちゅーぶ用のカメラを回す余裕はないということで、現・広報室長である富山が直々に依頼したものだだった。

松浦は二つ返事で了承した。

カメラ回しに自信があるわけではないが、被写体の自然な姿を撮影するには、カメラマンと被写体とが慣れ親しんだ仲である方が良くに決まっている。広報室で2年近く苦楽を共にした松浦・佐東コンビの、最後となる作品。お互いの有終の美を飾ような作品にしようと、松浦は意気込んでいた。

佐東は、松浦の期待にしっかり応えた。自然にふるまいながらも、時折カメラに視線をやり、いたずらっぽい目配せをする。松浦は、「佐東さん、芳根京子さんの大ファンでしたよね?」と、佐東をいじる言葉をかけることも忘れなかった。照れ笑いの表情もしっかりカメラに収めた。

また、事前に想定していたものではなかったが、班長・米澤と佐東との間で、特許審査官としてのセ

リフは何が最もふさわしいかを相談する、ちょっとシュールなシーンも撮影することができた。撮れ高としては十分だった。

ドラマ撮影は順調に進み、いよいよ佐東の出番が来た。

結局、佐東の見せ場を作るために台本は書き足され、女優・小野ゆり子演じる有田審査官と朝一緒に登庁する審査官の役があてがわれた。しかもセリフ付きの、主演女優・芳根京子との共演シーン。この上ない光栄であった。

タレントさんをカメラに収めるのはNGなので、松浦はビデオカメラをしまい、監督のそばでモニタ越しに佐東の演技を見守ることにした。

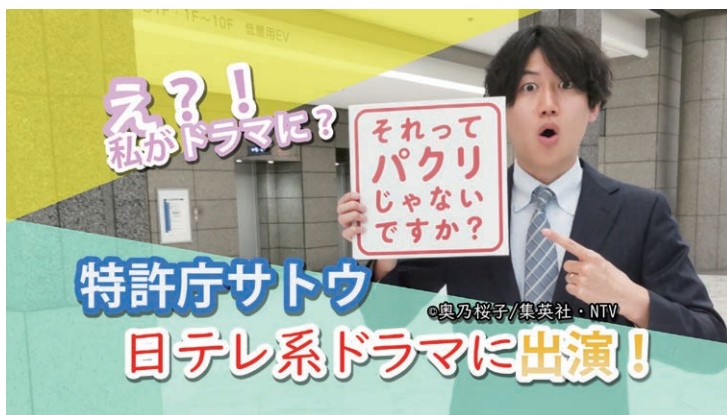
佐東は緊張するそぶりも見せなかった。時折、「佐東さん、『資料』のイントネーションが違うよ!」と監督に指摘されながらも、最後までにこやかに両女優との共演シーンを演じきった。

「彼、明るくていいね。やっぱり、人間、多少ミーハーなくらいが一番だね。」

ドラマ協力を飛びついた広報室のミーハー振りを見透かした監督の言葉だったが、何であろうとお褒めに預かれるのは光栄である。

「松浦さん、ありがとう。」

佐東出演シーンの収録後、監督は他のスタッフに対してもするように、松浦の肩をぽんぽんと叩いた。



https://www.youtube.com/watch?v=Y_dk5siJljs



図4 JPOちゅーぶ『特許庁サトウがドラマデビュー!? 日テレ系ドラマ「それってパクリじゃないですか?」に出演しました!』より

〈2023年5月〉

特許庁ロケ回である「それってパクリじゃないですか？」第5話が、5月10日に放送された。

この放送回の舞台が特許庁であることは、事前に特許庁からもPRリリースを出していたし、番組アカウントからも先出し動画が公開されていたので、すでに各所で話題になっていた。松浦がロケ日に撮影した動画を編集して作ったティザー動画も、順調に視聴回数を伸ばしていた。「特許庁職員がドラマに出るの？」と、一部の知財関係者もざわついていました。

松浦も視聴率アップに少しでも貢献しようと、同僚や親戚、友人に片っ端から連絡して、自分もエキストラとして映るかもしれないからぜひ見てほしい旨、宣伝していた。

佐東の登場シーンの出来映えは素晴らしかった。

有田審査官を待ち伏せしていた垂季の切実な様子に、何かを察した佐東審査官。一言有田と言葉を交わした後、二人を残して颯爽と立ち去る。カメラの前を横切る足元。短くも印象的な一コマだった。

「自然に溶け込んでいましたね！」「できる人感が醸し出されていたので、もしかして本物の職員さん？ と思いました！」視聴者からのどちらのコメントも、佐東にとって最高の賛辞であろう。

佐東は都合2回登場していた。登庁シーンに加えて、審査室内で同僚と資料をめくりつつ何やら議論している姿が、1秒ほど画面に映された。これは、番組制作チームの粋な計らいだろうと、松浦は受け止めた。

松浦がさらに嬉しかったのは、エンドクレジットに「佐東純也（特許庁職員）」、「特許庁職員のみなさま」の表示があったことだ。

我々にとっての最高のプレゼントである。

お世話になった番組制作スタッフの方々の顔が目に浮かぶ。

スタッフの皆さん、引き継いでくれた現・広報室の皆さん、庁内の関係者の皆さん。みんなみんな、本当にありがとう。皆さんの多大なる協力がなかったら、この前代未聞の試みは実現しなかった。

ドラマ内の言葉を借りれば、これこそまさに、関係者一同の「汗と涙の結晶」である。

こうして、松浦の広報室の残務処理は、ようやく終わったのだった。

後日、松浦は、Wikipediaの「それってパクリじゃないですか？ ～新米知的財産部員のお仕事～」のページに、出演者情報として佐東についての記載があることを見つけた。それをLINEで佐東に報告すると、佐東は、「victory」の文字とダブルピースするキャラクターのスタンプで応じた。

完

profile

松浦 安紀子（まつうら あきこ）

平成15年4月 特許庁入庁（特許審査第三部医療）

調整課審査企画室、スイス連邦工科大学チューリッヒ校客室研究員、審査第三部生命工学、INPIT研修部、審判部第25部門、審判部審判企画室、総務課広報室を経て、令和5年4月より審査第三部医療 主任首席審査官



この記事が気に入ったら、QRコードからスマホで「いいね！」を送ってね！

※ログイン不要・匿名でOK

